

マリークリスティーン・スキュンケ

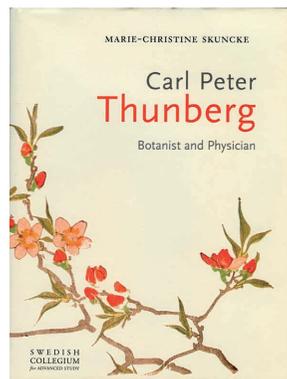
『カール・ペーテル・ツンベルク——植物学者にして医師、  
十八世紀において大洋を越えた経歴の構築』

Marie-Christine Skuncke, Carl Peter Thunberg: Botanist and Physician: Career-Building

*Across the Oceans in the Eighteenth Century.*

Uppsala: Swedish Collegium for Advanced Study, 2014.

ロマン・ジヨルダン



スウェーデンの博物学者カール・ツンベルク (Carl Peter Thunberg,

1743-1828) は日欧交流史において見過ごすことのできない人物で

ある。日本において、彼はエンゲルベルト・ケンペルやフィリッ

プ・フランツ・フォン・シーボルトと並び、鎖国の時代に日本の

知識人と知的交流を持った「出島の三学者」の一人とされている。

彼と交流を持った人物として、長崎の大通詞を務め、西洋医学の

家塾を開き、千人ほどの塾生を指導した吉雄耕牛や、ツンベルク

が来日する前の年に出版され、西洋の学問を日本へ導入するうえ

で先駆的な役割を果たした、解剖に関する書物『解体新書』

(二七七四年)の制作に関わった二人の医師、桂川甫周および中川

淳庵が挙げられる。

ヨーロッパにおいてもツンベルクは、限られた人しか来日する

ことができなかった時代に、博物学だけではなく文化および社会

の視点からも、日本の紹介に携わった数少ない人物の一人である

とされている。その時代に広く流布した、この主題に関する彼の

最も重要な著書は、八一二種の日本の植物についてラテン語で書

かれた『日本植物誌』(二七八四年)や、一七八八年から一七九三

年までの間に最初はスウェーデン語で出版され、その後五か国語

以上に訳された『旅行記』である。

ツンベルクと日本の関係については、スウェーデンおよび日本

における研究成果を集成した『ツンベルク研究資料』(一九五三

年)や、『旅行記』の中の日本に関する箇所(山田珠樹による邦訳

(一九二八年)、そして高橋文による邦訳(一九九四年)、あるいはさらに最近では、同じ箇所 Тайモン・スクリーチ(二〇〇五年)による英訳版で詳しく研究されている。しかし、(一七七五年八月から一七七六年十一月まで)日本で過ごしたその十五か月間は、たとえそれが最もよく知られていることとはいえ、ツンベルクの長く、実り豊かな経歴のごく一部に過ぎない。ヨンセル(Jonell)やノーデンスタム(Nordenskam)による研究のような、植物に関する彼の著作についての研究も存在するが、そのほとんどは残念ながらスウェーデン語のみで行なわれている。

マリー・クリステイヌ・スキュンケが本書で我々に提起しているのは、ツンベルクに関する、今日まで行なわれてきたものなかでも最も充実した個別研究にはかならない。三つの大陸での九年間(一七七一〜一七九九年)の旅行に加え、ウプサラ大学での長期の仕事(一七七九〜一八二八年)を継続していた半世紀を、この本は取り扱っている。とりわけ、獲得した知識、採取した標本、旅行中に得た繋がりを総動員できたことで、ヨーロッパの博物学において見過ごせない人物となり、また、師であるリンネの講座を引き継いだ、彼の若手教員としての最後の十年(一七七九〜一八七七年)を、この本は集中的に取り扱っている。

マリー・クリステイヌ・スキュンケは、ツンベルクのこのような豊かな経歴から、十八世紀の博物学に携わった研究者たちの

社会慣行に関する研究を、グローバルな視野で提起している。読み進めるにつれて多数の人物・場所・標本が出てくるにもかかわらず、この明確な目的が、この本を読むことを、常に非常に興味深いものとしてくれる。彼女の主要な典拠はツンベルクによって書かれた著作物ではあるが、さらに、ウプサラ大学の図書館に所蔵されている、スウェーデン語・オランダ語・ラテン語・フランス語・英語で書かれた三十八冊もの膨大な書簡集をも、彼女は典拠としている。十八世紀のスウェーデンとそれ以外のヨーロッパの国々の間の文化交流史の高名な専門家であり、ヨーロッパのいくつもの言語を解するマリー・クリステイヌ・スキュンケの能力が、この本を書き上げるうえで少なからず必要であった。日本のような最も遠く離れた地域のことを知るために、彼女はまた松田清やヴォルフガング・ミヒエルといった大家と知己を得ることができた。

残念ながらまだ日本語には訳されていないこの著作の大綱を、ここから書いていきたい。この本の中心的な概念は、この時代に博物学者たちの繋がりの原動力であった「交換関係」である。学生生活を終えた頃、すなわちその経歴における非常に早い段階で、ツンベルクは博物学の標本が、知的対象としての富であるだけではなく、それらの標本を売って単にお金を稼ぐだけでなく、とりわけ、多様なサービスを得て、その経歴を発展させるための通

貨のようなものでもあると、オランダの支援者たちから学んだ。彼自身はこの時期には、博物学と医学の知識をただ持っているだけであったが、採取の仕事と、そこから得られる利益によって、実際に学术界で成功を収めていく。彼は、動植物・鉱物の全体を分類し、命名することを計画していた、師リンネの関心を引き付ける。さらにリンネだけではなく、アムステルダム植物園に展示するために外国種の植物を探していたオランダの植物学者ニコラース・ブルマンなど、様々な関心を持つ、スウェーデンやオランダの六人ほどの支援者たちの関心も得る。彼らの要請に応じて、ツンベルクはケープタウン、バタヴィア〔ジャカルタの旧称〕以下〔〕内は訳者による注釈〕、セイロン〔スリランカの旧称〕などの植民地や、日本の出島といった、オランダ東インド会社の管轄地域に赴き、希少標本を採取するに至ったのである。

この本の最初の三章は、この途方もない旅に焦点を当てている。想像されるように、ツンベルクが現地で出会った人々との結び付きが、これらの章において重要な位置を占めている。彼は医療を提供したり、サトウキビやマツの木などの栽培といった商業計画に加わったり、ヨーロッパや旅行の道程で手に入れてきた標本および品物を寄贈したりすることで、植民地の支配階層からすぐに評判を得る。彼に物資や時には金銭の援助を行なうことのできた、これらの非常に影響力のある新たな支援者たちは、次第に連絡す

ることが難しくなっていたヨーロッパの支援者たちと少なくとも同じくらい、彼にとつて有益な存在となっていく。彼ら植民地の支援者のなかには、のちに研究仲間となった人物もいる。例えば、バタヴィア芸術科学協会の創設者であるラーデマーヘル (Rademaker) 参事官がそうであり、ツンベルクは帰国後も彼と長年にわたり交流を続けた。

この時期に、ツンベルクが植民地を一人で探索することは稀であった。フランス、イギリス、さらにはライバル関係にあったアムステルダム・スバルマンのようなスウェーデンの博物学者たちと、たびたび調査に赴いた。これらの出会いをきっかけに、当時、国王の庇護の下でジョゼフ・バンクスが先導しながら、イギリス人が独占し始めていたヨーロッパにおける博物学研究の状況について、目配りをするようになる。また、これらの連携は、彼にとつてその名をヨーロッパに知らしめる契機ともなった。

インド科学史の研究者カピル・ラジの表現を借りつつ著者が述べた言葉では、「知の担い手たち」である非ヨーロッパ人たちとも、ツンベルクは交流を深めた。ここで言う「知の担い手」たちとは、ツンベルクが旅を始めたケープタウンから、日本及びバタヴィアを経て、彼が旅を終えたセイロンまでの間に住む、医師や商人や職人のことであり、彼らはツンベルクが標本の取得するのを助けただけでなく、その標本の医療利用の方法を伝授したり、また

各々の言語を教えたりした。ツンベルクはその著作の中で、これらの情報について何度も取り上げているが、担い手たち自身については減多に紹介されていない。ただし、彼が日本滞在中に出会った翻訳者と医師に関しては例外である。

このような例外を設けた理由として、彼らが將軍や皇族に仕えるなどして、しばしば社会の中で高い地位を占めていたことから、彼らについて言及するだけでツンベルクの名声を高めることになったという事実が挙げられる。だが、それよりもさらに重要な理由として、彼らとの交流が豊かであったことが挙げられる。他の旅とは反対に、日本という非常に特殊な場所、その仕事を成功させるうえで、ツンベルクはヨーロッパ人の支配階層にも、ヨーロッパの学者にも頼ることができないような状況に置かれていた。出島に閉じ込められ、厳しい規則に従わされながら、彼はそれゆえ完全に日本の「知の担い手たち」に頼ることとなり、それゆえ彼らに対してふさわしい信頼を、かなりの程度まで与えていたのである。

ツンベルクの著作や、日本人との間でオランダ語で書き交わされた手紙や、別の日本語文献も用いながら、著者は、カピル・ラジが同時期にカルカッタに関して行なった研究<sup>1</sup>と同様の試みを行っている。それはすなわち、出島と長崎屋（オランダ東インド会社の日本における最高責任者の商館長であるカピタンの一行が、江戸

を訪れた際に定宿としていた商屋」という二つの文化の間での「接触領域」<sup>コンタクツレイン</sup>における交流の成功と限界を描き出すことである。彼女は次のように成功の例を挙げている。ツンベルクが大通詞の吉雄に梅毒の薬を伝えたことにより、吉雄は多くの塾生を集めることができた。そのお礼として吉雄がツンベルクに日本の珍しい通貨の収集品を寄贈したところ、ツンベルクはその通貨を後にスウェーデン国王に譲渡することで、死ぬまでその援助を受けられることとなった。しかし彼女はまた、次のように限界についても強調している。ツンベルクの著作のなかには、東洋の学問に対する彼の偏見や、東洋の学問のいわゆる非合理性や、はたまた東洋人と西洋人にとって、単純な技術交流を越えて、双方の学問の基礎に関する、より理論的な議論を行なうことの不可能性が読み取れるのであった。

おそらくツンベルクにとっては、現地での関係より、距離があつたにしてもヨーロッパの支援者たちとの関係を維持することが、やはり重要不可欠なものであり続けていた。それにはもちろん金銭的な理由もあつた。ツンベルクは慎ましやかな家庭の出であり、旅を継続するために、人が彼に約束した資金を当てにしていたのである。だが、資金を送ってもらうには、標本を確実に受け取ることが引き換え条件となつていたので、現地ではたとえ借金してでも、常に少しでも多くの人脉に頼らざるを得なかつた。

また、アフリカの動物や、ジャワ島の病気や、日本の役人といった現地での問題に立ち向かいながら、標本を採取するだけでは十分でなかった。それに加え、多くの生きた植物も含めた標本を支援者たちに、うまく送り届けなければならなかったのである。すべての物が確実に宛先へ届くようにするには、ありとあらゆる組織網が必要であり、ツンベルクは植民地とヨーロッパとを経由する様々な会社の船長や仲介者と繋がりを持ちながら、物資の複雑な輸送を行なった。箱が海に消えたり、悪意のある仲介者により盗まれたりするようなことがあれば、彼の支援者たちから、ただちに抗議の手紙が届いたものであった。

このことに加え、ツンベルクには、同じ物を欲しがりながらも、様々な形で援助を行っていた多くの支援者たちを満足させなければならなかったという事情もある。オランダ人たちは一般的に彼にお金を送ったが、スウェーデン人たちは様々な方法で、彼の経歴を発展させるための手助けをした。彼は旅の最中であつたが、ヨーロッパの博物学者の間での名声を高めるためには、ヨーロッパの学会で研究の成果を公表する必要があつた。また、ヨーロッパの雑誌に次々に掲載された手紙や記事を通じて、スウェーデン国王を含めた影響力のある人物に、その特別な旅について知ってもらう必要もあつた。さらに、師リンネが退官間際であり、ツンベルクより優秀ではない自分の息子をその後釜に据えようともく

ろんでいたため、ウプサラ大学の近しい人物たちが彼の応募を手助けしてくれる必要もあつた。つまり、スウェーデン人の間に置いてすら競合関係があり、ツンベルクは少しづつ標本を配りながら、その関係に配慮しなければならなかった。最後に、彼はまた自分自身と自分の研究のために、そして、ヨーロッパに戻つた際に、彼を助けてくれるかもしれない人々のために、標本を少し取っておかなくてはならなかった。

あらゆる努力はどうか報われ、ツンベルクはリンネの息子の下で、ウプサラ大学の実験教授の職を初めて得ることになる。第四章はこの二人の人物の間での軋轢について書かれてはいるが、それだけではなく、ツンベルクがその仕事を認めてもらい、上層部の支持を得て、ようやく望んでいた職に就くために行なつた涙ぐましい努力についても、書かれている。植民地の政治機構に関する細かい記述に続いて、その時代の学術界の見どころとしてはならない制度に関する記述がなされている。理事会も含めた大学そのものや、大学の選考過程や内部機構だけではなく、またツンベルクの評判を確立させることを可能にしてくれた、ヨーロッパ中の幅広い人々を対象とした学会、出版社、雑誌についても述べられている。スキュンケ女史はここで、十九世紀の転換期におけるヨーロッパの知識人の生活に関わる制度について優れた紹介を行なっている。参考文献一覧に記された本を読むことで、その紹介

を補充することができるであろう。

彼女はまた、ある属や種が誰かへの敬意を込めて名付けられることを例に、その時代の博物学者たちが、どのように、自分たちの学術研究を個人的な目的に利用していたか、ユーモアを交えながら我々に示している。弟子のホルンシュテット (C. E. Hornstedt) のために、一七八一年に執筆した論文に添えられた、*Deutzia*、*Bladhia*、*Wurnbea*〔ウツギ属・ヤブコウジ属・ヴルンベア属のことか〕とツンベルクが名付けた日本の三種類の植物の挿し絵が二〇五頁に転載されている。そして、その同じ箇所では彼女は、その時代にツンベルクがホルンシュテットをバタヴィアに派遣するため、アムステルダムでの *Deutzia* という人の金銭的援助を受けて、スウェーデン東インド会社の *Bladh* という人の船に乗せ、バタヴィア協会の *von Wurnbea* 氏という人に託すという計画を立てていたことを説明している。このように、スキュンケの研究の成果により、一見すると学術的で客観的な記述と思われるものが、実はツンベルクの情報網および計画であつたことが明らかになる。

最後に第五章では、彼の最も長い残りの経歴について検討している。例えばツンベルクが、フィラデルフィアからバタヴィアにまたがる三つの大陸の六十以上もの学会の会員にいかになつたか、時代の流れに沿って書かれている。また、大学への寄贈や、収集品を迎えるための新しい建物の建設により、博物学の収集品

が定着する過程についても考察されている。さらに、ツンベルクの『旅行記』のヨーロッパでの翻訳と編纂という困難な作業に加え、十九世紀の前半に、博物学および科学一般の新しい方法論が出てきたことを背景に、ツンベルクの影響が次第に凋落していったことについても論じられている。

日本を旅してから五十年後、滞在中に交流していた通詞の息子である茂伝の進からツンベルクが二通の手紙を受け取った際の、晩年のことを取り上げながら、彼と日本との関係に再び言及することで、この著作は感動的な仕方で締めくくられている。一通目の手紙はツンベルクに、彼の思い出は長崎に今でも残っていることを伝えており、おそらく彼の死後に届いた二通目の手紙は、彼の子孫たちがいつでも茂の家族の友情に頼ることができる、と請け合っている。この手紙は、大陸を越えて知識を普及させるべく、ツンベルクが生涯を通じて行なつた仕事を強く象徴しており、またこれらの交流が単に純粋に実益中心のものでは決してなく、人間的なものでもあつたことを想起させてくれる。この手紙は花が描かれた和紙に書かれていたが、それはこの本のカバーに転載されることとなつた。結局のところ、この著作は非常に野心的ではあるが、ユーモアや優しさを欠いてはおらず、内容豊富ではあるものの、理解しやすく、非常に見栄え良く挿し絵が添えられていると言えよう。

(翻訳・坂井礼文<sup>れいもん</sup>京都外国語大学非常勤講師)

原注

- (1) “Mapping Knowledge Go-Betweens in Calcutta, 1770-1820,” in *The Brokered World: Go-betweens and Global Intelligence, 1770-1820*, edited by Simon Schaffer, Lisa Roberts, Kapil Raj & James Delbourgo, Sagamore Beach, MA: Science History Publications, 2009, p. 105-150.